

## レバノン赤十字社学校防災事業「みらいぶらりい」 中間報告書

報告者: 村中 千廣 (事務管理要員)

派遣期間: 2019年6月3日～12月1日

派遣地: レバノン共和国

私は2019年6月初旬より、レバノン共和国の首都ベイルートへ派遣され、日本赤十字社(以下、日赤)が支援を行っているレバノン赤十字社(以下、レバノン赤)のシリア難民支援事業の事業管理業務を担っております。約3か月の期間が経過しましたので、2つの事業の内の1つである、学校防災事業の進捗を報告いたします。当事業は、「未来」と「Library(図書館)」を掛け合わせた「みらいぶらりい」という愛称で呼ばれています。

今尚、推定150万人(レバノン政府による)のシリア難民が滞在しているレバノンでは、急激に人口が増加したことにより、元来強固ではない公共のインフラに大きな負担がかかっています。小・中学校等の教育施設もその一つです。当事業は子どもたちが、より安全に学び、遊ぶことができるような環境づくりと、学校と子どもたちがレジリエンスを培うことを目的としており、各学校のニーズに基づいて学校施設の改修工事を行っています。3年間の事業期間が設定された当事業は、昨年度末に無事に3校における改修工事や図書施設の設置などを完了し1年目を終了しました。今年もレバノン赤の職員が、学校やコミュニティーを対象に新たに行った綿密な調査の結果を下に3つの学校が選定されており、順次改修工事が進められています。

2018年の支援対象校はトリポリ(レバノン北部第二の都市)とティール(南部第五の都市)と、レバノンの南北に跨っていましたが、2019年の支援対象校はいずれも同国第三の都市サイダ(地図上表記は「サイダー」)市内および周辺地域の学校が選ばれています。選定基準にはレバノン人だけではなく、一定数のシリア難民の子どもたちの受け入れを行っていることが含まれています。何れも公立の共学制の学校ですが、「共学制」は性別に関わらず就学可能であるということの意味しており、必ずしも授業が合同で行われているというわけではありません。日赤はレバノン赤に対して、レバノン人、シリア人だけではなく、パレスチナ人の生徒の数、および3グループの比率の報告も義務付けており、これは難民の受け入れを積極的に行っている学校やコミュニティーに対する日赤の絶対的な支持、そして赤十字基本原則に基づく「公平」な社会への実現に対する積極性を体現していると考えています。また、各学校の生徒の男女比率の報告を義務付けることにより、性別を問わ

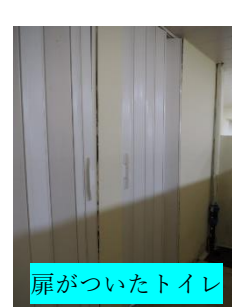


ず、平等に教育を受けられる社会構築への意識付けを奨励しています。文化的背景が異なる子どもたち、母国が対立関係にある子どもたちが共に遊び、共に学ぶ環境の整備を支援する、当事業の選定基準には、強い平和への想いが込められています。

当事業を担当しているレバノン赤の部署は、DRR (Disaster Risk Reduction [= 防災・減災]) と呼ばれ、国内の災害リスク軽減に努める活動を行っている発足後の活動年数が短い新しいチームです。図書館などの改築により教育の機会を向上させることを目的としている事業ですが、いずれの支援対象校でも単に改築を施し、必要物品を支給するだけではなく、災害発生時の危険を軽減するという観点から、地震や火事などに対する防災教育も行い、よりニーズが高く優先度の高い学校の選定が行われています。

### アイン・エル・ヘルワ公立小学校 – 講堂改修

1校目は同国最大のパレスチナ難民キャンプに隣接しており、多くのパレスチナ難民も就学している公立の小学校です。キャンプ内では武力衝突が頻発しており、過去には子どもたちが長時間学校の地下への避難を余儀なくされたこともあるとのこと。レバノン赤の調査では、同校への介入を3校の中で最も高い優先度で設定しています。学校の正面から僅か20mほどの距離にレバノン軍のチェックポイントがあり、私が視察に訪問させていただいた際には校内の視察にも関わらず兵士の同行が義務付けられ、物々しい雰囲気を感じました。また、退出時にはカメラに収めた写真を全点確認させなければならないほど、セキュリティーの管理が徹底されていました。同校での改修プロジェクトは地下の講堂を対象に行われ、6月末時点で改修作業は終了しています。講堂は有事の際にシェルターとして使用されることを想定しており、改修前の様子を確認すると、同施設の選定が妥当であることが伺えました。



## ガジエ公立学校 – 校庭改修

サイダ市の郊外に位置する同校は、2013年に建設されたばかりの新しい校舎であり、一見した限り内部設備は依然真新しく、改修工事のニーズは低いように感じられました。しかしながら、同校の改修対象である校庭に足を運んだ際には、改修の必要性が一目瞭然となりました。同校の校庭はコンクリート製であり、一定間隔で深い溝が彫られている状態でした。この溝が原因で多くの子どもたちが遊んでいる最中にけがをしているとのことで、学校はレバノン赤に対して改修の依頼を求めています。この選定基準については、日赤に提出された写真から得られる情報が限定的であったため、改修の必要性が事前に確認されていない状況でした。レバノン赤の担当者も現場を見るまでは同様の感想を抱いていたとのことで、現場アセスメントを行う際に収集すべき情報、そしてその報告(情報を正確に伝達すること)の重要性を目の当たりにする機会となりました。9月15日現在、同校でのプロジェクトは改修工事開始に向けた最終調整を行っています。



## アル・イスラ公立中学校 – 図書室改修

同校での改修対象の施設は当事業の名前の由来のとおり、図書室となりました。床や壁紙の劣化が目立ち、使用上の安全にも影響を及ぼす程度であると思われました。電気の配線や電灯も損傷しているものが多く、生徒による図書室の利用環境が著しく損なわれている状態です。







アル・イスラ公立中学校の改修工事は8月中旬に始まり、同月下旬に終了しました。湿気で傷んだカーペットの貼替と壁の補修作業が行われ、本棚も設置されました。



着々と予定どおりに改修作業を進めている現場のスタッフが、ボランティアで従事しているという事実を知った際には驚きを隠すことができませんでした。普段はそれぞれ、歯科医や建築士などとして、スタッフ同士異なる業界で働いているものの、同一のプロジェクトを達成するために、異職種のボランティアスタッフが知恵を寄せ集めて活動に取り組む様には心を打たれます。レバノン赤では世代を問わず多くのボランティアのスタッフが精力的に活動に参画しており、如何に若い世代の人々にとっても魅力のある身近な組織であるのかが伺うことができます。

私は、名目上「支援」を提供する側としてこの事業に携わらせていただいておりますが、教育や建築分野の専門知識等は持ち合わせておらず、知らないことで溢れている事業地では、私はむしろ無限の「学び」の機会を、与えていただいている側であると感じています。人道支援活動は決して一方通行のプロセスではないということを日々目の当たりにしています。当事業が日本のみなさまからのご寄付で成り立っている活動であるという事実と、常に真摯に向き合いながら活動に取り組んでまいります。ご寄付をしてくださったみなさまの想いが形となり、子どもたちの笑顔に変わるプロセスを目の当たりにするという、形容し難いほど貴重で素敵な体験をさせていただけることに感謝の気持ちを覚え、残りの派遣期間を全うしたいと思います。

今後とも日本赤十字社、大阪赤十字病院へのご支援をよろしくお願いいたします。

次回の報告では、改修が完了した施設での子どもたちの様子をお伝えいたします。当事業の発足背景および1年目の活動に関しては、当院ホームページより、別途以下の報告書をご覧ください。

「シリア難民の子どもたちの教育支援「みらいぶらりい」プロジェクト(中間報告)」

[https://www.osaka-med.jrc.or.jp/aboutus/international/pdf/006\\_128.pdf](https://www.osaka-med.jrc.or.jp/aboutus/international/pdf/006_128.pdf)

「シリア難民の子どもたちの教育支援「みらいぶらりい」プロジェクト(最終報告)」

[https://www.osaka-med.jrc.or.jp/aboutus/international/pdf/006\\_135.pdf](https://www.osaka-med.jrc.or.jp/aboutus/international/pdf/006_135.pdf)